

タイトル	北米北西海岸南部のクララム(Klallam)族が歩んできた道(<特集>共同研究報告：欧米諸国における多文化の問題と日本の課題)
著者	岡田，宏明
引用	北海学園大学人文論集，18：5-16
発行日	2001-03-31

北米北西海岸南部のクララム (Klallam) 族が 歩んできた道

岡 田 宏 明

1. 問題の所在

ファン・デ・フカ海峡の北のバンクーバー島にも、南のオリンピック半島にも、同一の民族集団に属する先住民がずっと昔から住み続けてきた。一般に北西海岸インディアンと称される先住民の諸グループは、現在のアメリカ合衆国とカナダの国境とは無関係に、北は東南アラスカから、カナダの B.C. 州を経て、南はワシントン州北西部にかけて、狩猟・漁撈を中心に高度に発達した首長制社会を形成していた。彼らの生業は、サケ・ニシン・オヒョウなどの漁撈が最も重要であり、シカやアシカ・アザラシなどの陸獣や海獣の狩猟がこれに次ぎ、貝類や木の根、漿果などの採取も安定した食料資源であった。狩猟や漁撈は男、植物性食料や貝の採集は女という分業にもとづき、近隣諸部族との抗争や略奪を繰返しながら、貴族・平民・奴隷からなる階級社会を発達させたのが、北西海岸インディアンの顕著な特徴である。筆者は、「豊かさとの対決」の姿勢を堅持し、18 世紀末以来の白人文明との接触を乗り越えて、主体的な開発を目指して近代化の過程を辿ってきた彼らの足どりに眼を向ける機会をもった。(岡田：1994)。とくに、アラスカ唯一の先住民保留地であるアネット島のメトラカトラ共同体の調査では、現在住民が直面している試練をどのように克服しつつあるかという課題について中間報告(岡田淳子編：2000)を発表した。

その後、メトラカトラに関する本報告書を作成するため、いくつかの文献に眼を通す作業を進める中で、メトラカトラの人びとと共通な姿勢を取りながら、W・ダンカン師のような強力な指導者にも、政府の補助金にも

頼らずに、初期の文化的改革を自らの発意で実行したオリンピック半島北岸のクララム族の事例を再発見し、興味をひかれたので、ここにその一端を紹介し、既発表の事例と比較しながら考察を加えることにした。

2. クララム族にみる接触の初期

J・クック船長の探険船がファン・デ・フカ海峡に到達したのは1778年であるが、J・ペレスの船隊は、それより4年早く、1774年にバンクーバー島に接岸し、ヌチャヌルス族と接し、彼らがおそらくは漂着船から鉄や銅で作った道具を入手していたことを確認した。しかし、実際にファン・デ・フカ海峡を通り抜け、クララム湾に姿を現したのは、1789年、グレイ船長が率いる船隊であった。その後は、1790年のクインパー、1790年のラソ船長に続いて、1792年にはバンクーバー船長がクララムの住地に到達し、自分が最初の発見者だと信じて、クララムの人たちにナイフやボタン、銅などを提供して交易を行った (Gibbs: 1877, 239)。

クララム族と白人交易者の間の衝突は、1828年にただ1度だけ、5名のクララム人が約束違反を理由に2名の白人を殺害するという形で起こった。この不幸な事件の数日後、バンクーバー砦から60名の白人が、復讐のために武器をもってやって来て、ダンジェネスの村を襲撃し、7名のクララムを殺し、カヌーや家屋も破壊した。クララムの犠牲者は、総計で25名にのぼったと言う (Dye: 1907)。

1832年には、ニスカリに交易所が建設され、その後数年間にクララム族が最低9回は毛皮をもって訪れたという記録がある。交易所には、家畜・工芸品・農産物が集積されており、クララムの人たちは目を見張ったことだろう。この頃の記録 (Kane: 1925) によると、クララムは弓矢の代りに鉄砲をもち、ガン追いこみ猟、シャマンの治療、貝貨の使用をまだ続けていた。

1850年には、クララムの村にほど近いポート・タウンゼントに最初の白人移住者が到来し、同じ年に「ヨーク公」と綽名されたクララムの族長ジェ

イムズ・バルチがサンフランシスコを訪れ、大きな感銘をうけて村に帰ってきた。その頃、ポート・ギャンブルとポート・ラドローでは製材機械が動きはじめ、そしてダンジェネスの村のすぐ近くに白人2名が入植した。

1855年には、民族誌の専門家ギブスがクララムの村を訪問し、人口は926人であると発表した (Gibbs: 1877)。政府の方針は、引越の費用を負担して、フード湾の南端に位置するスココミッシュ保留地に移すことだった。しかし、この計画はついに実行されず、クララム族は元の村にずっと住み続けた。

1856年には、次々に生起する揉めごとにそなえて、ポート・タウンゼントの近くにタウンゼント砦が設けられた。ところが、その後は事件はなんにも起こらず、砦の駐屯部隊はごく些細な一、二の事件の際に出動するにとどまった。

1859年のポート・タウンゼントの人口は白人300名とクララム人200名だった。サンフランシスコで白人文明の素晴らしさに触れて帰村した族長J・バルチは、自身禁酒にふみ切ると同時に、村人たちにも酒を控え、白人と仲良く暮らすように指導した。

E・ガンサー (Gunther: 1925) やV・ガーフィールド (Garfield: 1939, 1951) の業績を土台に、クララム族の民族誌をまとめたL・L・ラングネス (Langness: 1959) によると、クララム・インディアン近代化への道は比較的順調に進行したように見える。1857年にはダンジェネス村に灯台が完成し、周辺の白人移住者は約35名を数えた。しかし、当時の移住者たちは粗末な小屋に住み、村全体で2頭の馬と1台の馬車があるだけだった。

白人移住者の生活もまだ安定していなかったため、先住民たちは彼らの家にも勝手に出入りして食物を持ち出したり、畑のジャガイモも掘りおこして食べたりした。白人移住者J・アレンの留守中に、彼のインディアン妻が殺された事件が起こった翌日には、身体にペンキを塗り戦争の用意をしたインディアンと武器を手にした移住者が川を挟んで対峙するところまでいったが、和解金の支払いで決着がつき、それ以上の流血は見ずにすんだ (Weir: 1900, 120)。

1859年には、クララム郡が創設され、翌1860年には最初の選挙があって、1861年に3カ月間だけだったが学校も開かれた。1964年にはセキムからポート・エンジェルスまで、15マイルの道路が開通した。しかし、この頃の西洋風の建物は郵便局と学校しかなく、全体としてはさびれた田舎の景観だったが、1867年に、ダンジェネスに郡役所が建てられ、たちまちクララム郡内最大の町となった。

先住民同士の最後の争いが、1869年にクララムとチムシアンとの間で起こった。原因は、数年前にクララムの2人の女性がチムシアンに連れ去られたことで、昔からの伝統にもとづき、白人も話し合いに参加する形で係争が続けられた。クララムの襲撃でチムシアン側に男女、子ども合わせて約30名の死傷者が出る結果となり、チムシアンの男たちは殺された上に手足をもぎとられた。クララムからも1人犠牲者が出て、長い談判の末に戦利品を残して帰村した男たちは逮捕され、スココミッシュの牢に収監された。

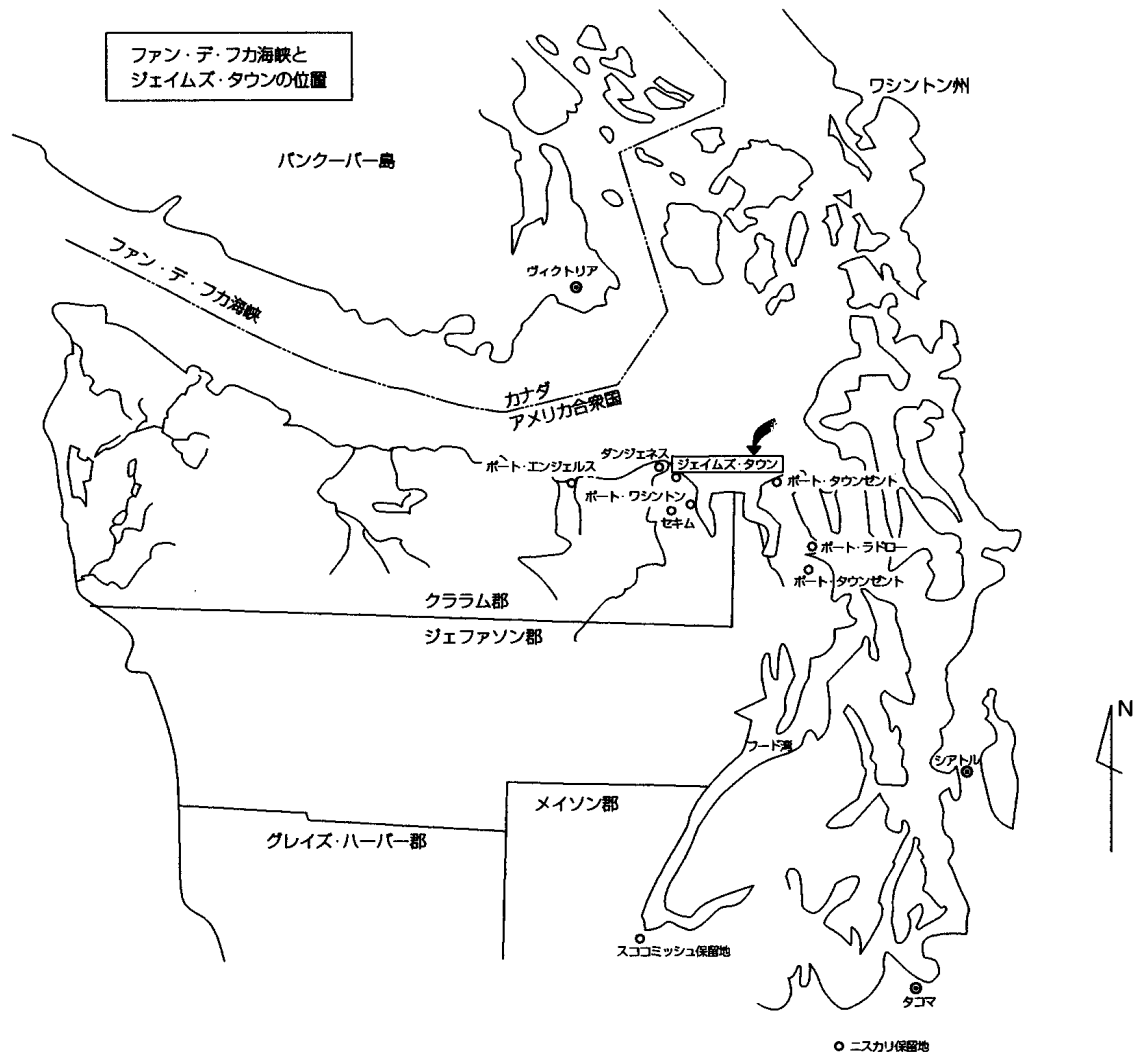
最初の接触から1862年までクララム族の人口はほぼ安定していたが、1875年に1300名に減少し、飲酒や精神症、盗み、争いなどが後を絶たず、白人たちは新しい保留地への収容を真剣に考えはじめた。

3. ジェイムズ・タウン

先住民のクララム人たちは、1873年まではダンジェネス村の丘の上に居住していたが、その年突然村の北側の砂州に移され、さらに、おそらくは土地所有者の都合で別の土地への移動を要求され、最後には保留地への移転を余儀なくされそうになった。サンフランシスコへの旅以来、自身も酒を慎み、村人にも節酒と平和の維持を説き続けたジェイムズ・バルチは自ら先頭に立ち、有志が資金を出し合って新しい村を建設するための土地の購入を呼びかけた。

こうして、12人の有志が思い思いに拠出した500ドルの資金で250エーカーの土地が彼らのものとなり、そこに建てられた町は最大の出資者の名

北米北西海岸南部のクララム (Klallam) 族が歩んできた道 (岡田)



を冠してジェイムズ・タウンと名づけられた。

新しい土地の下見に出かけた時、一行の中の一人が畑によさそうな土地を見つけた。1875年にジェイムズ・タウンに集結した人々は、早速土地を開墾してジャガイモを植えた。ヒマラヤスギの切株がごろごろしていて、畑を造る前に人の手で切株に火をつけて焼く必要があった。新しい畑では、ジャガイモの他に、小麦・カラスムギ・カブなどが植えられ、ウマ・ニワトリ・ウシの飼育も開始された。サクランボ・ナシ・リンゴも植樹されたが、その一部はイールズ牧師からの贈り物であったらしい。

ジェイムズ・タウンの建設には、120から140名の人々が協力した。出資者の大部分は若い人たちだったが、高齢者も早くから町に定着した。土地購入者の両親や親戚などは、気に入った場所に次々と家を建て、資金の未

提供者も空地を見つけて各自の家を建てた。

全体としての村の配置は、昔通りで、海に面して横一列に家々が立ち並び、両端に大きな家があり、一方はジェイムズ、他方はL・ジャックの家であった。この2軒は西洋風の切妻型の屋根で、他の家はすべて差掛け型の屋根で出来ており、どの家にも窓・扉・鍵・床などがそなえられていた。

ジェイムズ・タウン移転に伴う社会変化の一つは、結婚式の続出だった。新しい村の住人になったら西洋流の結婚式を挙げなければ子どもたちに家を継がせることができないと思ったようだ。

イールズ牧師は、1876年に11組の結婚式を執行することになった。10組目までは順調に進んだが、11組目の花嫁ははしかにかかっている顔が真赤だった。牧師にはしかが伝染することを怖れて、煙の充満した小屋に病人を運び、火を弱くして煙をへらした後に式を挙行した。高熱に耐えて式を終了した後、しばらくして病人の熱は下った。このような西洋風結婚式は、誰からも強制された訳ではなく、その時点では一夫多妻婚も禁じられてはいなかったのに、クララムの人々の発意で行われたのである (Eells: 1886)。

ジェイムズ・タウンでは、土地の購入や作物の栽培以外にも、バルチ族長の指導の下で新計画が次々と実行に移された。まず最初に、洋風の小さな建物が拘置所として建設された。この建物は、主に泥酔者を収容するために数年間使用された。上述したように、もともとは大酒飲みだったバルチが、酒の害に気づいて生活習慣を改めた後は、飲酒常習犯にきびしい罰金または実刑を課したのである。

バルチは、自分で発案した法規的な措置を住民によく説明して賛同を得た後に実行することに努めた。もちろん、クララム社会の条例については、スココミッシュ保留地の役所の指示を仰ぐ必要があったが、外部の役人が共同体の運営方針に口出しすることは実際にはひじょうに稀であった。

イールズ牧師は、また「ジェームズ・タウンの人々が政府の補助金に頼ることなく、自らの生活を向上させるには、正しい野心が必要だ」という哲学にもとづき、自分たちの努力で課題を解決しようと努めたと証言して

いる (Eells : 1886)。事実、ジェームズ・タウンには、白人の警官や法の執行者は一人もいなかった。

イールズ牧師は、さらに驚くべきこととして、1875 年春に、バルチがスココミッシュ保留地を訪問し、宗教的な指導を受けたいと熱望したことに触れている。バルチが、それまでキリスト教と無縁だったことを考えると、それはまさに異例な申し出であった。牧師は、心からの喜びをもって、チヌーク方言の賛美歌と、聖書に描かれた絵などを与えて、自己が属する組合教会派の教えの一部を彼に伝えた。その後、ジェームズ・タウンでは、バルチの音頭で祈りの集会が、日曜日毎に、村で一番清潔な家を選んで行われた。先住民たちの宗教活動を強く支持するイールズ牧師の協力により、まもなくジェームズ・タウンに教会の建設が進められることになり、白塗りの瀟洒な建物に鐘楼もついた立派な教会が完成した。

当時の金額で 166 ドル。建築費も労働力もほとんどすべてが自己負担で、白人移住者もかなり増加しつつあるクララム郡で最初の教会が建てられたことは、イールズ牧師ならずともまさしく驚嘆に値する出来事だった。因みに、1880 年のクララム郡の白人居住者は約 600 名。まだ彼らのために建てられた教会は一つもなかった。しかも、バルチ自身を含めて、クララム・インディアンは一人も洗礼を受けていなかったのである。

ジェームズ・タウンでは、先住民を中心に、教会に続いて学校の創設が進められた。教会の建物を利用して開いた学校には、常時 15～30 人の生徒たちが集った。先生役の白人牧師が 1883 年に辞任した後は、ジェームズ・タウンの住人の一人が後継者として授業を続けた。

これほど西洋文化を積極的に吸収する姿勢を示したジェームズ・タウンの人々の生活は短期間のうちに新旧文化混合の状況を呈した。再びイールズ牧師の証言によると、1883 年までには、薫製のサケが塩漬けにとって代られそうな勢いが見えはじめた。クララムの人の家の中には、時計・じゅうたん・箒から鏡まで置かれていたと言う。ブラシ・櫛・石けんなどに加えて、皿・ナイフ・フォーク・ランプ・バケツなども使われていた。もちろん、昔のままに作られたカヌーはあったが、それにも新しく櫂止めが付

けられていた。1890年頃までに、女性は伝統的な衣服を廃用したが、靴はまだはこうとしなかった。長さや重さの単位は、短期間に西洋風が変わった。

ジェイムズ・タウンの生活は、教会・学校・牢などが出現し大きく変わったが、昔からの階級制は基本的に維持され続けた。だが、貴族・平民・奴隷の居住区分は、しだいにあいまいになっていった。昔からの一夫多妻制は廃止はされなかったが、結婚式の普及とともにしだいに姿を消した。シャマンは、クララムの生活の上で、プラスにもマイナスにも大きな影響力をもっていた。ポトラッチや秘密結社の儀礼も、公けではないが続けられていた。イールズは、1878年に最大のポトラッチが開かれたと述べている(Eells:1893)。19世紀の最後の4半世紀は、白人・先住民両文化混合の時代であった。

その間に、1885年頃シェーカー教徒の活動が盛んになり、老若男女の信者が誕生し、新しい教会も出現した。しかし、新宗教は病人の治療が中心で、しだいに若者たちが離れてゆき、ジェイムズ・タウンの経済には大した貢献をしなかった。

ところが、1894年に、ワシントン・ハーバーからシェーカー教のW・ホール牧師とその甥ジェイコブが移住して来ると状況が変わる。

20世紀初頭のジェームズ・タウンは農業を主として地域経済に貢献し、一部では酪農も行われていた。1902年からは、F・ホールが小規模ながらカニ漁をはじめ、6名の作業員を使って毎日一定量のカニをシアトルに運んだ。農園や製材場にも何人かの労働者がいたが、クララムにとっては、水産業が賃銀労働も含めて最も大切な仕事だった。

1910年には、ジェイムズ・タウンのすぐ近くに学校が建ち、教師の一人としてクララム出身者が赴任した。シアトルの南のタコマで訓練をうけて出身地に戻ってきたのである。

当時の若者たちの間で、バンジョーやバイオリンなどの楽器が流行し、ジェイムズ・タウンでも屢々ダンス・パーティが催された。また、野球チームが編成され、ポート・ギャンブルやポート・タウンゼントまで遠征する

ことが町の選手たちの誇りであった。

その頃まで、ジェームズ・タウンの人々はダンジェネス湾の遠浅の海に出かけて自家用のサケを捕獲した。サケは塩漬けにして樽に入れて保存した。女性たちは、また、自給用に貝、漿果、根なども採集したが、捕採量はしだいに少なくなっていた。たまたま、その頃サケの魚槍漁が制限されるなど、これまで漁業規制の対象外とされてきたクララム族にも規制が及ぶようになった。こうした規制による経済的影響は小なものではなかったのでクララムの漁師たちの憤慨を呼んだ。

漁業への圧力のおかげで、農業の重要性は増大したが、ジェームズ・タウンには十分な収穫量を確保できる畑の所有者は数えるほどしかいなかった。平均すると、クララム族は、農産物・魚・労賃にほぼ同じぐらいずつ依存していた。

このような規制にも拘わらず、クララム族は豊富な水産資源のおかげで、他の地区の先住民たちよりも豊かな生活を享受することができた。

1910 年前後に、W・ホールの甥の J・ホールと、もう一人の若者がヨーロッパ製の新型漁船を購入した。全長 26 フィートもある、二人のご自慢の船は商業用の漁獲に使われた。J・ホールは叔父の死後カニ漁の仕事を受継いだ。新しいものの好きの彼は、町で一番早く、自分の家に、浴槽と温水用ボイラーを設置した。電話の付設も、自動車の購入 (1918) も一番早く、やがて数台の自動車を所有した。電気洗濯機も最初買いこみ、カヌーの舳を四角くして船外発動機を装着したのも J・ホールであった。ここまでくると、クララム社会に昔からあった物は、数隻のカヌーと高齢者の記憶のみで、しだいに増える車のための舗装工事が目立つようになった。

1923 年の国勢調査によると、ジェームズ・タウンの人口はたった 76 名。最盛時からみると半減した。1940 年のシェイカー教教会の火事の際、教徒は J・ホールを含めてわずか 6 名。町の青年のうち数名が第 2 次大戦に参加したが、切角帰国しても仕事はほとんどなく、農園はさびれる一方で、生活は激変し、頼りの漁業も競争が激しく、職を求める若者たちはシアトルやタコマなどの都会に移る他はなかった。

4. 若干の考察

1～3に見たような、白人植民者との接触後の北米先住民の文化変化の過程については、同じ北西海岸領域で我々も2年間にわたって調査を行い、その中間報告を発表した(岡田淳子編：2000)。クララム族の隣人にあたるチムシアン族の一部で、カナダのB.C.州から1887年にアラスカ最南端のアネット島のメトラカトラに移住し、はじめはダンカン牧師の指導をうけたが、1920年代からは自主的な経済および文化の開発を推進してきたメトラカトラ村の住民も、基本的には同じ道筋をたどって近代化の歩みを続けてきた。北米や世界全体で見ると、白人外来者に環境を破壊され、自主的な歩みにほど遠い破滅への道をたどった人々も少なくなかった。昔から海や山の幸に恵まれ、高度な文化を創出し、早くから外来者と交易網を結んだ北西海岸地域は、クララムやメトラカトラのように自主的な開発に成功した集団が多かったと言えるが、それでも北部のイーヤック(Eyak)族のように、彼らの存在の証が地名にしか残っていない例もある。

過去の先住民文化の伝統を重んずるあまり、「高度な」白人文明との接触による変化に焦点を合わせた「文化変容」の研究が大勢を占めていた頃、クララム族の実態をつぶさに調べ、「文化」だけではなくジェイムズ・バルチのような指導者の力も文化改革の推進力たり得たとしたラングネスの主張は、今日でも十分に通用する卓見である(Langness：1984)。メトラカトラにおける改革の成功も、先住民自身の自覚と努力がなければ決して実現しなかったであろう。ジェイムズが自ら酒を断ち、牢獄を作り、大金を投じて町づくりに献身したことが仲間にあたえた影響は想像以上だったと思われる。

外来者との接触に伴う先住民社会文化の変化は、少くともクララムやメトラカトラで見ると、一方が持ちこんだ物や制度を他方がなかば自動的に受容するというものではない。最近の開発人類学的研究が明かにしているように、先住民が主体的に係わらないプロジェクトが成功したことはない(Berger：1985, Young & Chandler：1997, etc.)。今後は、「ダンカ

ン社会モデル」の探求だけでなく、ジェイムズ・バルチやウィルヘルムとジェイコブ・ホール親子らの行動に注目し、先住民自身による意志決定に関する事例を数多く集めて検討してみる必要があると言えよう。

引用・参考文献

Berger, Thomas R.

1985 “*Village Journey*”. Hill & Wang, New York.

Dye, Eva E.

1907 “Earliest Expedition against Puget Sound Indians.” *Historical Quarterly* 1 (2).

Eells, Myron

1886 “Ten Years’ Missionary Work at Skokomish”. Boston.

Garfield, V.

1939 “Timshian Clan and Society”. *University of Washington Publications in Anthropology* 7: 167-340. Seattle, University of Washington Press.

1951 “*The Timshian and Their Neighbors*” in *the Timshian: Their Arts and Music*; Viola E. Garfield, Paul Wingert & Marius Barbeau. *Publications of the American Ethnological Society* 18, University of Washington Press.

Gibbs, George

1877 Tribes of Western Washington and Northwest Oregon. *Contributions to American Ethnology* 1: 157-242.

Gunther, Erna

1925 *Klallam Folktales*. *University of Washington Publications in Anthropology* 1 (4) : 113-70.

Kane, Paul

1925 *Wandering of an Artist among the Indians of North America*. Toronto.

Langness L.L.

1959 “*A Case of Post-Contact Reform among the Clallam*”, Master’s thesis, University of Washington.

1984 “Individual Psychology and Cultural Change: An Ethnohistorical Case from the Klallam” in J.Miller & C.M.Eastman ed. *The Tsimshian and their Neighbors of the North Pacific Coast* : 255-280.

岡田淳子編

2000 『変容する Metlakatla Indian Community』.

Report to the Department of Education and science, Sapporo.

岡田宏明

1994 『北の文化誌』 アカデミア出版会, 京都.

Weir, Allen

1900 “Roughing It on Puget Sound in the Early Sixties.” *Washington Historian* 1 (2): 70-75.

Young, David E.and Craig Candler

1997 “*Paradoxes of Northern Development in Canada on Anthropological Perspective*”, Proceeding of the 11th International Symposium, Abashiri, 1- 10.